

アメリカを売った男

2008(平成20)年2月26日鑑賞〈東宝試写室〉

★★★★



監督・脚本＝ピリー・レイ／特別顧問＝エリック・オニール／出演＝クリス・クーパー／ライアン・フィリップ／ローラ・リニー／デニス・ヘイスバート／カロリン・ダバーナ／キャスリーン・クインラン／ブルース・デイヴィソン（プレシディオ配給／2007年アメリカ映画／110分）

第2章

面白くて勉強になる

……「二重スパイ」を扱った映画はいつの時代も面白いが、この映画は「事実にもとづく」物語。2001年2月18日に逮捕されたFBI捜査官ロバート・ハンセンこそ、「アメリカを売った男」と表現された二重スパイだが、それはどのようにして暴かれたの……？ 男同士の知能戦がメインだが、それ以上のポイントはやはり人間性の把握。法科大学院の教材として最適だが……。

「BREACH」とは……？ 「ロバート・ハンセン事件」とは……？

この映画の原題は『BREACH』で、これは、「(法律・義務・約束などの)違反、不履行、破棄」を意味するもの。したがって、「breach of contract」となると「契約違反」、「breach of confidence」となると「(秘密漏洩による)信頼の裏切り」という意味。それが、なぜ邦題では『アメリカを売った男』なの……？ それは、この映画は実際に起こった「米国史上最大の情報災害」といわれるロバート・ハンセン事件を描いた映画だから。

FBI特別捜査官のロバート・ハンセンは、2001年2月18日逮捕された。彼の罪は、20年以上にわたりFBIのみならずCIA、ホワイトハウス、国防総省、国家安全保障局の極秘文書を大量にソ連(ロシア)のKGBに売り続けていたというものだ。この映画は、このハンセンが逮捕されるまでの2カ月間を史実にもとづいて克明に描いたもの。

なぜエリック・オニールが特別顧問に……？

ハンセンの逮捕は、FBIの若き訓練捜査官エリック・オニールの献身的な努力と知

謀によって実現したものの。ところがこの映画は、ハンセンの逮捕直後オニールがFBIを辞めるところで終わる。そして、彼はその後弁護士に転身したとのこと。そのことからわかるように、オニールはジョージ・ワシントン大学法科大学院およびオーバーン大学を卒業後、FBIの特殊調査グループの捜査員になっていたわけだから、日本の法科大学院とは大違い。そんなところも、しっかりと。

この映画鑑賞後、スタッフとして監督・脚本のビリー・レイに続いて、「特別顧問 エリック・オニール」と表示されているのを見て「あれっ」と思ったのはそのため。そこでプレスシートをよく調べてみると、エリック・オニールは、ワシントンDCにあるDLAパイパー社の国防および国土安全保障関連の弁護士で、この映画は彼の話からヒントを得ているとのこと。したがって、彼が史実にもとづいたこの映画づくりにおいて特別顧問をつとめているのはむしろ当然。

ちなみに、彼はロバート・ハンセン事件の捜査に従事中、妻ジュリアナとの間で数々の家庭危機に直面していたが、きっとそれもすべて真実のお話……。弁護士に転身してからはジュリアナとの仲もいいようで、メリーランドに在住しているとのことだ。

仕事と家庭の両立は……？

CIAの創設という使命のために身を捧げた主人公エドワード・ウィルソン（マット・デイモン）の闘いを描いた映画が『グッド・シェパード』（06年）だった。ここでは、仕事のことを一切家庭でしゃべることができないウィルソンと、それに耐えきれない妻クローバー（アンジェリーナ・ジョリー）との間の夫婦関係の崩壊が深刻だったが、仕事と家庭の両立が難しいのはFBIもCIAも同じ。

エリック・オニール（ライアン・フィリップ）は現在は監視任務ばかりに従事しているが、将来はFBI捜査官になることを目指して論文(?)を提出したりしている若き野心家。そんなオニールが、日曜日に妻のジュリアナ（カロリン・ダバーナ）と楽しく過ごしている時、急遽出頭命令が出され、そこで上司の女性捜査官ケイト・パウズ（ローラ・リニー）から下された命令は、新しく創設される部署“情報保護部”でロバート・ハンセン（クリス・クーパー）の下で仕事せよということ。しかし実はこれは建前で、真の命令は徹底的にハンセンをマークして、毎日報告書を提出せよというものだ。

情報保護部といっても、そのスタッフはハンセンとオニールの2人だけ。そのうえ聞くとところによれば、ハンセンは優秀だが堅物で、誰も信用しないイヤな奴。したがって、妻のジュリアナがこのハンセンを嫌ったのは当然だが、ハンセンは妻のボニー（キャスリーン・クインラン）と共に平気でオニールとジュリアナの家庭生活に入り込んでくるから、ジュリアナはたまったものではない。そのうえ、オニールは仕事のことについてひと言も話してくれないから、ジュリアナのイライラは募るばかり。

CIAもFBIも、第一線でバリバリと働く捜査官になろうとすれば、仕事と家庭の両立は所詮ムリなのかも……？

若手の成長には良き上司が……

他方、最初はすべての行動をハンセンから見透かされているため、オドオドしながら身上調査を続けていたオニールだったが、次第にさすが美人で有能な上司バロウズが抜擢しただけの能力を発揮しはじめることに。

仕事と家庭の両立という試練は当然だが、ホントの試練は優秀な二重スパイ、ハンセンとの知能戦、というより騙し合い！なるほど、こういう手順でこう調べるのか！なるほど、こう言われたらこう切り返すのか！と大いに感心。この押したり引いたり、またハツタリをかましたり突き放したりの対応力は大いに勉強になるから、この映画も法科大学院の勉強の貴重なネタ。

また、すごいと感心するのは、多少危なっかしい面はあっても上司の判断の下に、ここまで任せるといふ役割分担と責任の所在を明確にしていること。平和ボケが続く中で腐ってしまった日本の官僚システムでは、とてもこんな対応はムリ。この映画を観ていると、若手の成長には良き上司が不可欠と、つい思ってしまったが……。

これぞ性格俳優！

日本の性格俳優の代表は竹中直人や香川照之……？彼らはその性格俳優としての役割を完璧に発揮した場合、「怪演」と表現されることが多い。この映画で二重スパイのハンセンを演じたクリス・クーパーは、アメリカにおける性格俳優の代表……？プレスシートでは、「“カメレオン俳優”として有名で、役づくりへの妥協なきアプローチが高く評価されている」と紹介されているが、この「カメレオン俳優」は「性格俳優」と矛盾する評価ではなく、当然両立しうる概念だ。



© 2007 Universal Studios. All Rights Reserved.

映画前半は、いくらマークしても何も怪しいところが見つからないため、上司のバロウズにイラ立ちをぶつけるオニールの姿が登場する。そこでバロウズがオニールに明かしたのが、ハンセンは20年以上にわたってソ連（ロシア）のKGBにアメリカの国家機密を漏らしている二重スパイだという恐るべき「事実」。身辺調査の密命を帯びて最も身近で働いているオニールに対してすら何の疑問も抱かせないほど、ハンセンの偽装ぶりは完璧だったということだ。

そんな二重スパイの役をパーフェクトに演ずるためには、パーフェクトな性格俳優でなければならないのは当然。したがって、この映画におけるクリス・クーバーの演技は、まさに怪演！

2008(平成20)年2月27日記